

## 岩倉具視と宇田淵の往復書簡【添付資料】

百瀬ちどり

### 1 岩倉具視書簡（宇田栗園宛 明治元年二月二十三日）

\*『岩倉具視関係文書三』二〇〇

軽暖逐日相催、意気頗裕を覚候、誠に其後は軍務頗多端、誠に其方老年にも有之、遠路一入大儀に存候処、深被心頭両子輔翼、格別精勤致具候趣、時々伝承に及感喜之至に存候、東山道は別而行届、民心も追々王化に向服候事、畢竟其方等盡力・謹力一致之功と存し、志心之本懐不過此事候、薩藩并知地庄次（伊地知正治）己に其手に属し有之趣、此度参謀之任に被仰付候間、尚此末何分相和し同心・協力・成功に至り候様、偏に奮発頼入候、北島・香川等多年之情知、万事苦心致具、拙者にも誠に大慶に存候事故、尚又追々確報東国之事情等承り度、宜頼入候也

二月廿三日

栗園江

具視

### 2 岩倉具視書簡（宇田栗園ほか二名宛 明治元年二月二十三日） \*『岩倉具視関係文書三』二〇一

春暖暫相催、一同安泰珍重存候、扱昼夜之勤勞、千辛万苦令遥察候次第は紙上難盡候、若年之兩人不容易大任と雖御奉公之筋貫通今日に至候儀は、全く諸士之補翼に有之候、且本陣之堅固是又衆勇士之忠誠一和に出候而、盤石も猶重しとせず、予は乍赤面親子之情として高枕不可安義有之候間、此上弥以一同へ厚く御依頼申入候、只々兄弟兩人戰場に出馬諸隊を指揮、一人は敵丸に斃れ候事希望致候、是は公卿従来柔弱之気性を一變為致候基とも相成、朝廷之御為と存候、何卒上下一心乍此上王事鞅之程偏御頼申入候、乍併各等其一心を自愛し、病魔の為に討死不被致様、為国家所希望候、仍早々如此候也

二月廿三日

具視

宇田栗園殿

香川敬三殿

北島千太郎殿

外諸志士中

### 3 岩倉具視書簡（宇田栗園ほか二名宛 明治元年閏四月十二日） \*『岩倉具視関係文書三』二二七

昼夜之勤勞千辛万苦遠察之次第紙上に盡すを得ず、若年両兒素り軍政をしらす、不容易大任

を蒙り、恐怖此事に候得とも、聊御奉公之筋相立今日に至り候事、ひとへに足下等之補翼に出る而已、且本陣之堅固、亦衆士の忠誠深謀之致す処盤石も尚重しとせず、予始私義乍赤面親子情、高枕不可言もの有り、此上弥以而御依頼申す之外一物もなく、唯願くは兄弟之中巻人に而も戦場に出馬、身を以て弾丸に当らん事を欲す、是臣父子言行不空を冀望す討会進軍に至り尤勤むへしく、自余可申入事なし、各等一身自愛、必病之ために斃るなかれと言而已、早々以上

後四月十二日

右兵衛督 花押

宇田殿 (淵)

香川殿 (敬三)

藤井殿 (九成)

尚申不相変繁勤不盡心事、直に一筆申入候迄也

4 宇田淵書簡 (岩倉具視宛 明治二年閏六月十三日) \*『岩倉具視関係文書四』三九

亜相公閣下

宇田淵

御親閲

謹上

謹啓

梅雨之気色にて、連日鬱陶敷天氣に御座候、東京は如何と想像仕り候

閣下益御機嫌能、夙夜御勉勵被遊候趣、為 国家奉恭賀候、頃日は追々御用も御運ひに相成難有奉存候、御賞典被為行候に付臣等迄御慰勞過分之御目録下賜、難有仕合には候得共、実に恐縮之至候、臣等に至ては所謂徒に文墨を以て議論するのみ、攻城・野戦之功あるにあらず、参謀の名のみを以て今日之恩榮を蒙りし事、心に於て深く愧入候次第に候、乍去右賜金を分与して、親戚・故旧窮乏之者を賑わし、同く

聖恩に欲しめんと存し、呉々御礼奉申上候

一中御門卿御発駕臣等大に失望仕候上に確乎不拔之御持論無之ては、御留守之処も少しく懸念仕候、同卿へ御托し申上置候件々委曲御聞取奉願候

一公議所日誌・議案録等追々閲見仕候処、何れも不都合千万之議論のみ可取者、十に二三を難得と存候、臣最初存候には逐一批評を加へ

閣下之電覽に供し可申之処、愈出て愈不都合之論のみにて批評を加へ候意も無之様に相成申し候、右等之愚論御上木に相成候は、真に梨棗に災すと申者にて、国事に於て有害て益有之間敷く存候、殊に外国官問題箇条等公然流布致して、無妨ものに候哉懸念仕候

「実名を可用議等謀々、其中増田某等之論に此事急務に非ず、暫く旧貫に仍るへし

右之論言簡にして真に実地之論なり

「赦令可止之論は、一を知て二不知、御大礼毎に必赦を被行候ては御不都合に候得共、

有時ては不可無論者此意味は不解と存候

「割腹可禁之論尤可笑論者は、定て臆病者と被存候

朝廷天下之士を御憐恤被遊候 思召より可惜人物罪み足るを不待候て死を急候事を御防被遊候、一通りの御禁令は 思召之厚きを天下に示す所以に候得共、官より割腹を被命候刑典は不可欠事と存候、士道を失はしめずして刑を加るには割腹尤妙にて候

「雙刀可廢之論杯は、關係實に不小徒に天下之士を激せしむるのみとても、不可行行はれて不相済と存候、草莽激徒杯一夕に此論を聞ては一同定て憤然何れも其腰間横る所の日本刀を按し、論者に逢著して其氷の如き鋒三寸を食はしめん事を欲し居候事と推察仕候、嘆息重嘆息

右等之如く不行して、天下に無害行はれて大害を引出し候論のみ多き様に相覺申候、之を要するに、議事はともかくも右上木は断然御止に相成候方妙と奉存候、但御取捨之上御採用に相成候実地至当之論のみ刻に相成候様にても仕度候

一二見一鷗之事、河田佐久間(河田景与)申居候には、彼は長州に居り候節、好て人を讒すると申説有之、

万一之事有之候ては如何に候間、此旨序に

閣下迄申上置具候様との事に御座候、臣推察仕候に、一鷗必ずしも人を讒するには有之間敷候得共、好て人之是非を論ずる癖は有之哉と存候、何れも閣下之明鑒に有之義と奉存候一越後之模様實に不容易、岩崎・田崎兩人、過日帰京、委曲演説、中御門卿も御配慮被為、在臣を以て河田へ御謀りに相成、河田より兩人へ東下申付、中御門卿御同道にて御下りに相成申候、逐一御聴取可被下候

一槇山東下可致様被 仰越 極姫様も御同行可然御事と奉存候

一京師頗る静謐、御案し不遊様所希候、過日入谷氏へ御托しにて被 仰越候極秘御用、臣謹て拜承、乍不及精々心懸可申候

一大橋慎三東下被 仰付、臣に於ても難有奉存候、同人へ託し言上仕候事件も有之、御聴取奉希候、以上恐惶稽首

六月十三日

臣淵

亜相公閣下

5 宇田淵書簡 (岩倉具視宛 明治二年六月十七日) \*『岩倉具視關係文書四』四一

謹啓

益御機嫌克被為涉恭賀候、然は過日東京に於て御布令相成候由、当地へも相廻り候、向後諸藩士御登用に相成候節は、何等の官に御用ひにて可然哉藩へ御問合に可相成、且差支無之哉も御尋に相成候趣、加之是迄御用ひ相成居人物も差支有之とて無遠慮可申出との事、藩々へ御達しに相成候、右は如何之御次第に候哉、右様之御布令有之候上は、藩に於て都合あしき

人物は決して差出不申候は藩之奸謀か、或は役に不立者に可有之、実に

朝廷之御為に不相成、嘆息之至に候、尤右は公明正大

〔朝廷に於て無私を示す思召かは不存候得共、夫にては全く

朝権と申者失せ果て、却て紛乱之基と被存候、全体公明正大・公儀与論を被盡杯と申事、今日之流行語にて御尤には相聞候得共、元来衆に謀ると申も、廟堂上に於て両三箇之御方永世不易確乎不拔之所置は箇様々々と御見込相立候上、無私を示す為、一応は衆に御謀りと申迄にて可然と奉存候、瑣屑之事迄衆議を御採用と申ては却て不宜と存候、古昔信長・豊公

杯の如き英雄、何れも自己方寸中に於て策を決し候、其謀議に与り候者は股肱数人に不過、最初より衆に謀りて後、決すると申にては無之衆に謀るは畢竟、其万一之失策なきを要する耳に御座候、今日滿天下、公明正大を看板と致し其実は私のみ実に可嘆之至に候、御一新後、毎度立派之御布令有之、其名目に於ては十分相立居候間、最早此上御布令等は余り不出様仕度、只々其実地相運ひ候処に御注意被為在候様奉希候、右実地之相運ひには虚唱之人物を退け、実着之者を御用ひ、有之外は有之間敷と奉存候、天下今日之急務、虚を棄、実を取り、儉を尚ひ、奢を省き、小人を遠け、忠良を親むに有之と存候、今日才子は固より御入用之時節に候得共、辨佞口給虚唱之才子は、終に天下を誤るのみ、何之御役にも相立申間敷有才且忠なる者御用ひ被遊度、古之英雄・豪傑、大に事を成就するは何れも有才は申迄も無之、加之に至誠・勤人処々之人物にて御座候、何程議論は立派にても、其為人輕薄にて人望の戻り候様之者を用ひ候ては、国を治むる事は出来難き哉と存候、乍去大変革之世中、今後は輕薄才子も間に逢ひ可申哉に候得共、古に於ては決して無之事に御座候

近日、彈正台御建に相成候由、難有事に奉存候、然るに門脇五位杯、彈正大忠とかに相成候由、当地にても噂有之、右様之人物出頭致し候彈正台ならば事可知と申居候、此場に御用ひ有之人物は、行状人に信せらる、は申迄も無之、人之正奸曲直を辨する識鑒ありて、この人ならば必実切相立可申と衆仰て之を望む様に無之ては畢竟名のみにて、折角台を御立被遊候甲斐有之間敷と奉存候

世上之士農工商、何れも 朝政を誹謗致事は実に甚敷ものにて御座候、乍去臣も 官府出仕之身上故、世上之議論耳に入候事も自然少きと存、種々意を用いて探り申候処、実にけしからぬものにて

廟堂之御方に御聞込被遊候ては百倍致し可申存候、人口は防ぎ難き者に候得共、右之模様にては政務に關係致し候者真に可畏可勤事にて、右世人之不服処も畢竟政務に關係致候者遊蕩不相止故に御座候、此遊蕩御禁令速に不被行しては何程之に良法相立候ても実地総て不相運、下民決して之を不信、百事盡く畫餅と相成可申候

右件々杞憂之余り不憚申上候、語不敬に涉り候処も不少、偏に御海容奉祈候、多罪々々謹白

六月十七日

亜相公閣下

臣淵

6 宇田淵書簡 (岩倉具視宛 明治二年十月一七日) \*『岩倉具視関係文書四』六六

謹啓時下新寒相催候処 閣下益御清穆御奉職可被遊奉恭賀候、然は過日 閣下御賞典結構仰を被為蒙候趣拝承仕、臣等に至迄難有仕合に奉存候、恭賀不過之候

過日来当地市民少々沸騰之気味有之、長官公府へ御出張にて御説諭に相成、臣も両日共陪從仕候、松田・楨村等必死盡力、市民等頗る承伏之体にて、既に行啓も先無御滞被為濟、恐悦之至奉存、右市民沸騰にも種々區別有之、鳩居之悴久兵衛(熊谷直行)・伊勢久(池村邦則)之弟等を始とし百名計り、最初府へ嘆願に出候、是徒は真に憂国之赤心より発し、遷都に相成候ては一大事と存、彼肴屋八兵衛 後光明帝の茶毘を御止め申し上候先蹤を追ひ、此時に当り町人なからも傍觀致し候而は不相濟と存込候より起り候処、府之説諭に因て速に承伏致し候、又上京亭番組・三番組等には尤頑固にして、是は畢竟 行幸を御止め申を名として窮迫を訴へ、御救恤を催促致し候趣意に被察候、尤先達而御救恤御沙汰之趣有府に於て申聞有之候得共、小前之者此趣承知不致者も可有哉と被察候に付、猶又右難有御趣意之程懇諭有之、先承伏致し候趣に相見へ候、尤右救恤は府に於て至急手を下し候運ひに御座候、其他或は張紙之為めに扇動せられ、又は隣町より誘引せられ候町も有之由に候、乍去総而上・中・下京六十五組之内、彼是申候町は上京に於て四五組、下に於て二三組位ひ之事に御座候、今日に至り先何事も無之、此段御省慮被遊候様希候、右 行啓之事、彈正台よりは御延引に相成候様強て申出候へ共、長官公断然不承知にて、臣等に於ても至極難有奉存候、尤府并兵部省も御延引は不宣と申論にて、先々程克相運ひ申候、右始終之次第長官公より被仰遊候義と奉存候得共、猶又内々為御心得言上仕置候、返すくも可悪は草莽不逞之徒、張紙等を以愚民を煽動し、政府政事之邪魔を致し候者に而、是等者共其筋に於て随分探索致し居候へ共、即今手に入不申趣に候

十月七日(ママ)

臣淵

亞相公閣下

7 宇田淵書簡 (岩倉具視宛 明治三年四月八日) \*『岩倉具視関係文書四』二二

謹啓

清和之好時節に御座候処、閣下益御勝常不相変御勉勵御奉職可被遊上為至尊下蒼生恭賀不過之奉存候

扱過日

還幸御延引御布告文之事、且地子免除并御下け金之事、段々御配慮を以何れも程能相運ひ、臣に於ても実に難有次第に奉存候、其後御届も申上候通、府下市民説諭等先行届、地子免除・御下け金等之事は、何れも難有存居候趣にて

還幸御延引に就て、民心沸騰と申気味は先々無之、御安心被遊候様所希候

○当月朔日、府中之官員一同、河東練兵場に於て皇居を選擇して

天恩を謝し奉り、加茂両社へ詣して神恩を謝し申候、且府下之民人も当日より三日之間、参拝を差許し候処、何れも参詣致し候趣に而右参拝差許し候、就ては万一新に衣服を製し華麗を競い、驕奢ケ間敷事に至り候ては不相濟義と存し、心得違ひ無之様再度布告致し置候処、夫故に哉格別之事も無之、頗る其體戴を得て至極妙に御座候、鳩居堂之組町之由

天有恩

地無税

と申文字有之職を立罷出候、是等尤面白く覺申候、服は大抵常之服にて罷出候、祇園町のみは男子ふくりんの武先羽織、女子木綿之反故染位ひの事にて、是等は場所柄之事殊に右地子免除は、格別難有存居候所故、右等は可恕事と存候、尤三日之内繰合せ、職業差支に不相成様致し、参拝致し候義は勝手に連日其業を廢し、必参拝可致との趣意にては無之趣、再度之布告も有之候故、連日業を廢し候様之者も無之趣にて、先大いに安心仕候、

○過日、長官卿より柴田へ御托しにて御申入れに相成、私よりも申上置候一件、何卒至急御決議相成候様奉希候、留守官府中に被建置候ては実に廉々不都合之議有之、是は実地を目撃致し候人は不待職者して、其不可なる事を知申候に御座候、是非元の如く、禁中に被置不申候ては不叶義と奉存候、且留守官、宮内省と合併之事、是は少々六ヶ敷事歟と奉恐察候へ共、右様相成候は、実に御便利にて、且御用も余程相省け可申、実地御都合よろしき義と奉存候、長官卿も右御申立に就ては余程御決心之御様子、若御採用無之於てはとて留守難相勤は、留守は留守之者是ならは相勤可申と申見込之通、御聞届に不相成候ては不叶義との御噂に御座候、此辺御含にて何分御盡力奉希候

頃日、府は知事下参事在職之儘謹慎被 仰付候由承り申候、右は定て其内西帰に相成可申と存、難有次第に候、就ては榎村(正直)も同様謹慎致し居候へ共、日限相濟候は、出仕可被 仰付、夫に付臣は兼て粗其情実も言上致し置候通り。何卒免職相成候様御配慮奉希候、尤右兼職辞退之表は、過日辨官へ差出し置申候、河田(兼与)氏も情実は兼て被申上置候次第に御座候間、是も辞表差出し可申由に候、乍去臣と違ひ河田は大参事本官之事故、右辞表本官被免兼職留守判官のみに被 仰付度とも難申と先両職共辞し奉り候趣に御座候、此辺御含被遊、可然御配慮奉希候

○前文長官卿御申立之義も、今度府之模様右之次第に有之、且宮内省も烏丸卿東下中故、旁以好機会と奉存候、何分御盡力可被成下候、右辺之事も決而長官卿一己之私情を以被仰置候譯にては無之、実に為国家御体裁もよく、御便利にも可有処を御謀り被遊候次第に御座候、此末

御還幸も何れ之年を期し可申哉、就ては留守も前途猶遠き事故、右御申立之通被仰付無之ては旁以御不便可有之と奉存候、御模様度々変換致し候義は実に不好次第に候へ共、其不可なるを御承知被遊なから強て非を御遂被遊、後日に至り不得止御改に相成候よりは此好機会を不失、御不都合出来不致内に断然御改に相成候方可然と奉存候、乍恐不憚忌諱申上候、再拜

四月八日

淵

亜相公閣下

8 宇田淵書簡 (岩倉具視宛 明治三年四月十三日) \*『岩倉具視関係文書四』二四

謹啓 過日より内々申立に相成居り候留守官府と之合併御解放之事、申立通御採用に可相成哉之御模様、近日吉井監督正上京にて内々承知仕候、就ては河田(景寺)并私共も府之職務は御免に相成候様、偏に奉希候、乍去長官卿事務御取扱之義は是非是迄之運被 仰付置度奉懇祈候、万一長官卿御取扱迄被免候様にては、是亦大に御不都合にて、此末又々旧冬断刑延引の如き事件出来可仕哉も難計と御案し申上候間、是丈けは是非元の如く被 仰付置候様仕度候、右事務取扱は被免別段之 御沙汰を以、府も留守官之管轄杯と申様之御評議も或は可被在哉とも奉恐察候得共、七人のみにては中々行届不申、万事に付不都合も可有之と存候間、必々元の如く被 仰付置候様奉祈候、瑣屑之事は御関係に不及候得共、大事件は知府事之上に在て御決断に相成候は、至極妙にて、畢竟為 朝廷御都合と奉存候、何分御熟議所希候、過日も内々申上置候、河田義は両職とも辞し申趣表にも相認差出候得共、其情実是迄之兼職留守判官のみに被 仰付候は、難有御請可申上趣に候、兵部大丞に復職可被 仰御評議も被為候哉にも奉恐察候得共、同人今日之情実にては兵部之方は大に困却可仕と被察候、其次第は頃日大坂出張之兵部省杯洋癖如何にも甚敷、恣に脱刀して他出致し、ビイドロ障子・椅子に寄り候杯は申迄の無之、一同之模様少し志有之者は実に長太息之外無之由、藤村四郎杯も逆も此末兵部之勤仕は見込無之、独力衆議を排する事不能に付本官を辞し可申趣内々申居候、右之次第に候間河田杯は猶更にて決して再び兵部之出仕は不欲趣に候、但し其懷実何卒当地に於て御奉公相勤申度、東下之儀は可相成は御免を蒙り度由内々申居候次第にて、右之通御舎被遊可然御配慮奉希候、当官宮内省合併之事も長官卿御噂にて是非申立、被 仰付候様致し度との御事にて、過日も申候通り右合併御沙汰に相成候は、多少之人員も御減少にてよろしく御費用も余程相省け七人社実地御便利と相考申候、是亦何卒御申立通り御沙汰に相成候様御盡力奉希候、稽首再拜

四月十三日

淵

岩倉亜相公閣下

9 【参考】 宇田淵書簡 (多田好問宛 明治四年正月十七日) \*『岩倉具視関係史料』下 757

海の見える森美術館所蔵

新年御祝詞芽出度申納候、時下春寒料峭不相交、御捷健御奉職可被成奉遥賀候、然ハ淵辞職願之通旧臘廿二日被聞食、御直垂地等拜領仕、次て廿四日御扶持下賜、京都府貫属士族被仰付重疊難有仕合ニハ候へ共、不才微力レ報之之道を不知、深く恐懼之至ニ候、右御吹聴申入候、且桂宮家令被仰付候ニ付、日々出仕は致居候へ共、旧弊改正之成功如何有之哉と是又恐懼之次第ニ候、山中(猷)・岩村(高俊)等申合せ諸事取計ひ致候事ニ候、此間御手簡被下忝披見仕候、長法寺へ之御書状早速相違可申候、乍憚令弟及ひ潔子・郁太(宇田郁太郎)等へよろしく御寄声所希候也、艸々稽首

正月十七日

淵

耕雨老兄(多田好問)

梧右

10 宇田淵書簡写 (岩倉具視宛 明治十一年十二月二十六日) \*对岳文庫旧蔵文書

京都市歴史資料館蔵マイクロ写真帳

上書

岩倉右府公閣下 親展

宇田淵 拜上

謹啓

過日ハ御船中御無異御帰着被遊候由尔後追日寒感相加候処、益御清祥被為濟、為國家恭賀不遇之奉存候、当地御滞在中ハ不相交御懸命ヲ蒙り、そのみならず種々賜ヲ拜受し、殊ニ盛□ニ陪し奉候段難有仕合ニ奉存候、右呉々御礼奉申上候 閣下兼御配慮被為在候当地華族歌道講習之義、去廿四日、始めて当座之催し有之候ニ付、小生も出頭仕候処、座中凡四十余名随分盛会ニて、各自課題之詠歌も其工拙ハさて置、思ひ之外何連も速に出来候様ニて此通ニて何卒永続致し候ハ、折角御厚キ 上之思召、且 閣下之御配慮も終に貫徹可仕哉と存、企望不啻候、右人数之内、半ハ村山、半ハ香樹院と各自之所望ニ任セ添削ヲ被乞候趣、山本殿嘖有之、右ハ可然義ニ候得共、時ありてハ詠艸式冊宛テ認メ、両人之点ヲ被受候ハ、両人所見之異なるも相分り、是亦一益ニ可成哉之旨愚考申述置候事ニ候

旧女官身分御取扱方并禄米被下方等御改正相成候ニ付、右御達書并辞令書共本省より相廻り候ニ付、兼て御指揮も被為在候通昨廿五日、桂宮ニ於て一同ヲ呼び出し命婦以上御取扱之分ハ午前十時、以下ハ午後一時、夫々達済之上更ニ右御改正之御趣意次第等、過日 閣下御内諾之辺ニ基キ小生方寸ヲ以密々申諭し候処、一同深く感戴之模様ニて、何れも早速書面を以御内議へ向ケ、厚く御礼可申上旨申居候



以上兩件ハ 閣下格別御配慮被遊候義ニ御座候処、先右様之次第ニ付御安慮被遊度所希候、  
廿二日御発之尊翰、昨日夕景拝見仕候、旧女官祿高勤労年数ニ応し可被減筈之調書、別紙書  
纏御廻しに相成、正ニ落手仕候、命之如く高野房子始内々見せ遣候様可仕候、右可被感筈之  
処、特恩を以不被感次第ハ、昨日も既ニ反復申諭し候処、何れも了解之模様ニ付、決して彼  
是不服ヲ申唱へ候者ハ有之間敷候得共、別紙ヲ見せ置候ハ、猶更貫徹可仕御賢考御尤と奉存  
候、

先者右申上度、御答旁如斯ニ候也、稽首再拜

十一月廿六日

淵

岩倉右府公

閣下

副啓

桂宮御礼御申上ニ相成、早速披露仕置候也

淵